最近ニ於ケル本邦結核豫防狀況

內務省衞生局
醫學博士　佐藤　正

本邦ニ於ケル最近ノ結核死亡率（人口萬ニ付）ハ左ノ如シ。

年次	全結核死亡	肺結核死亡
一九二八年	一九・二六	一三・八二
一九二九年	一九・六二	一四・〇五

而シテ人口十萬以上ノ都市ノミニ就テ其ノ結核死亡率（人口萬ニ付）ヲ見レバ左ノ如シ。

年次	全結核死亡	肺結核死亡
一九二八年	二四・九〇	一八・〇八
一九二九年	二五・〇九	一八・一五

結核豫防法ニヨリ道府縣ニ於テハ業態上病毒傳播ノ虞アル職業ニ從事スル者又ハ病毒蔓延ノ虞アル場所ニ居住シ若クハ其ノ場所ニ於テ職業ニ從事スル者ニ對シテ健康診斷ヲ施行ス、最近二ケ年間ニ於ケル其ノ成績ヲ表示スレバ上表ノ如シ。

年次	健康診斷ヲ受ケタル人員	患者ト決定セラレタル人員	受診者ニ對スル患者千分比
一九二八年	一、四五四四〇五	四六〇	〇・三二
一九二九年	一、五五四三七一	二八七	〇・一八

是等ノ患者中、業態上病毒傳播ノ虞アル職業ニ從事スルモノニ對シテハソノ從業ヲ禁止ス、其ノ數ハ一九二八年九三名、一九二九年八七名ニシテ其ノ間六名ヲ減ズ、而シテ從業禁止ノ處分ヲ受ケタルモノ又ハ療養ノ途ナキ結核患者ニシテ地方長官ガ結核豫防上特ニ必要ト認メ結核療養所ニ入所セシメタル結果、生活スルコト能ハザル者ニ對シテハ生活費ヲ補給ス、右生活費ノ補給ヲ受ケタルモノ、數及補給額ハ上表ノ如シ。

年次	被補給者 實數	被補給者 延數	補給總額
一九二八年	三七	九、〇九六	三、七四六、七八圓
一九二九年	四四	一〇、九二九	四、〇二〇、六一

又結核患者又ハ死者アリタル場所ニ付、家屋物件ノ消毒其ノ他ノ豫防方法ヲ施行シタル件數ハ左ノ如シ。

年次	行政官廳自ラ爲シタルモノ	管理者等ヲシテ爲サシメタルモノ	計
一九二八年	三、四八〇	一四、九一五	一八、三九五
一九二九年	九三八	一七、九八五	一八、九二三

古着、古蒲團、古本、紙屑、襤褸、飲食物其ノ他ノ物件ニシテ病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アルモノニ對シ行政官廳ガ結核豫防上必要ト認メ之ガ消毒又ハ廢棄ヲ爲サシメ又ハ自ラ之ヲ爲シタル件數ハ左ノ如シ。

年次	消毒 行政官廳ノ爲シモノタル	消毒 其他	消毒 計	廢棄 行政官廳ノ爲シタルモノ	廢棄 其他	廢棄 計
一九二八年	七、一五六	五三、五八一	六〇、七三七	一四五	一、四二〇	一、五六五
一九二九年	一、〇〇九	六一、一八一	六二、一九〇	二二七	二、四七五	二、六五二

年次	制限	禁止
一九二八年	二	—
一九二九年	—	—

次ニ全國ニ於ケル結核早期診斷所數ハ下表ノ如シ。

市町村立結核早期診斷所數

年次	診斷所數	診斷人員 有料	診斷人員 無料	診斷人員 計	從事醫員數
一九二九年三月末日現在	一	—	五五九	五五九	五
一九三〇年同	一	—	九六一	九六一	五

又採光換氣其ノ他ニ於テ衞生上不良ナル建物ニシテ結核豫防法ニヨリ地方長官ガ結核豫防上必要ト認メ其ノ使用ヲ制限シ又ハ禁止シタルモノ、數上表ノ如シ。

私立結核早期診斷所數

年次	診斷所數			診斷人員			
	結核豫防協會ノ設置ニ係ルモノ	其他ノ團體ノ設置ニ係ルモノ	計	有料	無料	計	從事醫員數
一九二九年三月末日現在	一、三一一	一二八	一、四三九	一、一九九	一二、八六六	一四、〇六五	一、四七九
一九三〇年三月末日現在	一、三四七	一〇九	一、四五六	四、三三七	一二、三八七	一六、七二四	一、五八〇

內務大臣ハ結核患者ニシテ療養ノ途ナキモノヲ收容セシムル爲人口五萬以上ノ市又ハ特ニ必要ト認ムル其ノ他ノ公共團體ニ對シテ結核療養所ノ設置ヲ命ズルコトヲ得、此規定ニ基キ內務大臣ノ命令ニヨリ設置セラレタル療養所數ハ一九三〇年末ニ於テ十六所ニシテ其ノ收容定員二、四〇五名ニシテ前卽チ一九二九年ニ比シ療養所數ニ於テ一ヲ增シ收容定員ニ於テ五六名ヲ增加セリ、此他縣立結核療養所トシテ設置セラレ法律ニヨル命令結核療養所ト同樣ニ取扱ハルベキモノハ福島縣ニ一箇アリ其ノ收容定員數五〇名ナリ、故ニ是等ヲ合シテ公立結核療養所數ハ十七箇其ノ收容定員數ハ二、四五五名ナリ。

結核豫防ニ關シテ道府縣及其ノ他ノ公共團體ノ支出セル經費ニ對シ國庫ハ一九二九年ニ於テ約三五七、三一二圓ヲ補助セリ。

抄録

結核專門雜誌

Zeitschrift für Tuberkulose, Bd. 56, H. 5. 1930.

1、BCGヲ以テセル結核豫防接種

Calmett A.

著者ハ諸學者ノBCGニ對スル批判ヲ記載シ其反對說ニ對シ之ヲ辯明セリ、然シテ曰ク、結核ニ對スル豫防施種ハ毒性ガ確實ニ失ハレタル生菌ニヨツテノミ可能ナリ此BCGヲ以テスル時ハ結核無キ小兒及結核ニ感受性アル動物ノ淋巴系ガ飽和セラレ之ニヨリテ毒性强キ菌ニ對スル重感染ニ對シ免疫ヲ得セシムルモノナリ、然シテ此施種ハ注射セル菌ガ消失セラル、カ又ハ死滅セラル、ニオヨビテ消失スト、然シテBCGノ無害ナルコトハスデニ證明濟ミナリ又BCGノ免疫的價値ニ就テモ證明セラル。然シテペトロフカラ證明セラレタル處ニヨレバ毒性ノ高マルコトニ就テBCGカラ二ツノ菌性ヲ分チ、得然モソノ一ハ海猩ニ病的ニ作用ストアレドモ著者ハペトロフハ確カニ原種ヲ用ヒザリシ爲ナラント信ズト、又「ツベルクリンアレルギー」ヲ缺ケル實驗ハ經口的BCG施種ニヨル菌ノ不實在ノ證明ニハナラヌト云ヒ、免疫ハ常ニ「アレルギー」ノ前ニ現ハレ「アレルギー」ハ免疫ノ證據トシテ認メラル、ト、然シテ一九三〇年ノ三月迄ニフランス國ニ於テ二二五〇〇〇例ノ小兒ニ經口的ニBCGヲ與ヘ何等ノ害ナク一般死亡率ハ與ヘザル小兒ノモノヨリモ確カニ減少セリ又小兒ノ發育程度ハ決シテ之ガ爲ニ害セラル、コトナシト又皮下、皮內筋肉內注入ニテモ何等ノ害ナク又效果ヲ得、唯著者等ニ缺クル處ハ全世界一般ニワタリテノ大人數的實驗アルノミト。

（太田抄）

2、妊娠ニ於ケル肺結核症ニ就テ

K. Lydtin u. R. Linde

著者等ハ從來種々ノ學者ニヨレバ肺結核症ニ對スル妊褥ノ合併ガ惡影響ヲ來ス場合ノ割合ヲ六・四％乃至一〇・〇％ノ間ヲ動搖セルヲ記シ之ニ對シ、從來ノ學者ガ結核ノ質ニ關セズスベテノ結核症ヲ一緒ニ見做ス故ニコノ動搖アリトセリ、又ツルバン、ゲルハルト氏ノⅠⅡⅢノ病期分類丈ケニテハ不充分ナリ。著者ハ之ヲ肺尖結核症及肺尖結核症疑似ト確實ナル結核症ノ二種ニ分テリ、患者ハ一九一八—一九二八ノ間ニテミュルヘン第一內科ニ來レルモノヲ試驗材料トシ第Ⅰ類ニテハ妊褥中絕ノ可否ヲ問合セニ來ル者、一四九例ニシテ之ハ其中一名死亡、二名增惡、一二三例ハ一〇年中一回モ增惡セシコトナシ卽カヽル種類ノ者ニテハ妊褥ハ中絕ノ可否ハ殆ンド問題ニナラズト、卽疾病ニ大ナル關係ヲ持タズ。第Ⅱ類ニテハ妊褥ノ以前ヨリ結核症ニ罹レル者ト妊褥中ニ發病セル者トノ二種類ニ分テリ前者ハ二〇例ニテ其中一二例死亡中絕何翌年中迄ニ死亡セリ、後者ハ一九例ニテ一三例ハ發病後一年以內ニ死亡セリ、卽カク後者ソ如キモノニテハ三年以上生ヲ保チシ者ヲ見ズ、卽全體ニ見テ昔ヨリノ肺結核症ニ妊褥ノ合併ハ重要視ス可シトノ說ヲ裏書セリ、之ガ治療ニハ適應アレバ速カニ壓縮治療法ヲ行フ可シト。

（太田抄）

3、兩側肺結核症ノ場合人工氣胸及橫隔膜

捻除法ヲ以テセル相對側治療

(L. Dünner u. S. Spiro)

著者ハ一二例ノ患者ニ就テ人工氣胸術及横隔膜捻除術トヲ相互側ニ行ヒシニ七例ハ效果ヲ得シモ五例ハ不結果ニ終レリ之皆重症患者ノミヲ例ニトリタル結果ニシテ此方法モ適應症ヲ擇ム時ハ良結果ヲ得ベシト然シテ兩側人工氣胸ノ時ノ如ク出來得ルカギリ永ク安靜時間ヲ保ツコトヲ必要トスト記シ各例ノ病狀ヲ記載セリ。

(太田抄)

4、實驗的結核症ニ於テ海猩ノ脾臟ノ容積增大ニ就テ並ニ其X線的實驗

(Sebök. Loránd)

動物實驗ニ於テ結核感染獸ノ觀察ハ動物解剖ニヨリテノミナサレタリ然ラズンバ唯體溫、體重又ハ他ノ外的觀察ノミニ止リ之ヲ內部的ニ然モ生ノマヽ、觀察スルコト困難ナリ又海猩ノ如キ小動物ニ於テハX線檢査モ充分ニ達シ得ラレズトナシ著者ハ其一トシテ脾臟ノ肥大ヲX線的ニ知ル方法ヲ研究セリ卽三耗ノ直徑ヲ持チ〇・二耗ノ厚ミヲ持ツ丸キ銅片ヲ造リ、之ヲ滅菌的ニ體重五—六〇〇瓦ノ雄海猩ノ左側背柱二五糎ノ主切斷ヲ造リ脾臟ヲ出シ此銅片ヲ脾臟ニ縫ヒ付クルモノナリ、然シテ之ヲ封閉シ尙動物ヲ飼育シ恢復スルニ及ビテ、實驗ニ用フルナリ、著者ハ一瓶ノ毒性アルコッホ氏菌ヲ皮下ニ感染セシメ之ヲX線ニテ脾臟ヲ透視シ得ル位ニナル迄待チ次ニ動物ノ腹內ニ種々ノ藥物化學的物質ヲ注入セリ、卽局所反應ヲ惹起シ得可キ物質舊「ツベルクリン」種々ノ「ワクチン」類、牛乳等、然ルニ注射後三十六時間ニ於テ反應トシテ極度ニ肥大セルモ三日後ニハ又小トナレリ然モ最初注射前ヨリハ大ナリ、然シテ動物ハ一般榮養狀態ガ良キ程著シキ反應ヲ呈スルコトヲ認メ得、故ニ此實驗ヲナスニハ動物ノナル可ク大ニ榮養狀態良キモノヲ選ブ脾臟肥大ハ之ニ關スルユエナリ又菌量ニ關ス、又疑ハシキ物質ノ注射スルニ後七日十四日ノ潛在期間ヲ置キテ脾臟肥大ヲ見ル時ハ之ガ結核症診斷ヲ確實ニスルコトヲ得ト。

(太田抄)

5、結核症ノ化學療法(動物試驗)

J. v. Darányi

著者ハ從來行ハレシ結核ノ化學的療法ガ動物ノ全身狀態等ヲ觀察スルニ止リ病理解剖學的ニ觀察スルコトヲ得ズ、又長期間ノ觀察ニ待タザル可ラザルヲ否トシ結核菌肉汁培養ノ稍〻古キ厚キ物ヲ少量トリ之ヲ家兎ノ後脚內側ノ皮下ニ「ポッケット」ヲ作リソノ中ニ菌苔ヲ入ル、時ハ殆ンド治癒シ難キ潰瘍ヲ造ル之ニ種々ノ化學物質ヲ用ヒテ療法ヲ行フ時ハソノ潰瘍ノ如何ヲ見テソノ效果ノ可否ヲ知リ得ベシト。

(太田抄)

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose, Bd. 75, H. 5/6. 1930.

6、結核症ノ研究　七、猿ノ自然性結核症ノ經過ニ及ボス豫防接種ノ影響、第二報

Arno Nohlen.

著者ガ Kalbfleisch ト共ニ Beitr. Klin. TbK. Bd. 71 u. 72 ニ發表シタ實驗成績ニ就テ Calmette u. Wilbert ハ猿ノ感染方法ガ粗雜デアルコト及ビ吾々ノ國內デハ猿ガ使用前ニ全然非結核性デアル事ガ保證サレナイト云フ二點デ反駁ヲ加ヘタ。著者ハコノ非難ハ不當ダト信ズルガ今回ハ彼等佛學者ノ指示

スル要約ニ從ツテ實驗ヲ行ヒ、併テ余ノ從來ノ方法ニヨル實驗ヲモ對照シテ行ツタ。ソノ結果ニヨルト以上二樣ノ方法ノ孰レニ依ルモBCGデ處置シタ動物ノ大多數ハ自然感染ノ結核症ノ爲ニ斃死シタ。之ニヨツテ Calmette 氏等ノ反駁ハ根據ナキモノデアル事ハ明白デアルト。（柴田抄）

7、肺空洞ノ位置測定ニ就テ

A. Generisch.

近來ハ栓塞材料ヲ用キテ肺臓ノ患部ニ充分ナ收縮ヲ來サシメル爲ニ胸腔内ニ於ケル空洞ノ正確ナ位置ヲ測定スル事ニ力メル樣ニナツタ、著者ハ之レニ關シ「レントゲン」照射ニヨル簡單ナ手技ヲ發表シテ居ル。（柴田抄）

8、Rheinland ニ於ケル慢性肺結核症經過ノ主ナル型

N. Westenrijk.

各地ニ於ケル慢性肺結核症ノ經過ヲ研究スルト各々特徴ヲ持ツテ居ル樣ニ思ハレル、例ヘババリデハ高熱ノモノガ多クウィーンデハ之レニ反シテ熱ノ低イモノガ多イ、コレハ恐ラクハ氣候ノ影響デアルラシイ。ラインランドノ氣候ハ變化ニ富ミ、風ガ強イノガ特有デアル。著者ハ七〇例ノ材料ヲ檢査シコテノ地方ノ慢性肺結核症ノ病型トシテ次ノ七群ヲ得タ、一、纖維性ノモノ、二、散在シタ病竈及ビ浸潤ヲ有シテ居テ最初カラ廣汎デナイ病變、三、廣イ病變ヘノ移行型、四、肺門周圍ノ浸潤、五、肋膜炎、六、初メカラ廣汎デ斷ヘズ進行スル病型、七、初メカラ廣汎デ急劇ニ進行スル病型。（柴田抄）

9、年代ヲ通ジテノ結核症ノ經過

F. Andvord.

諾威ヲ始メ瑞西、英國、丁抹等ニ於ケル主トシテ一八九六年以降ノ結核死亡統計ヲ觀察シタ、結核死亡ハ總テノ文明國デハコ、數十年ハ低下ノ時期ニアリ、コノ傾向ハ年々强クナル樣デアル。各年代（五年宛ニ分ケテ）ニ就テ結核死亡率ヲ年齡順ニ配列スルト大凡個有ノ規則正シイ波狀曲線ヲ得ル、從ツテ初年兒ノ死亡率ハソノ次ノ年代ノ成人ノ死亡率ヲ豫知セシメル、卽チ或ル年代ノ初年兒ノ結核死亡ガ減少スル時ニハ常ニ二十乃至二十五年後ニ於ケル成人ノ死亡ニ同樣ナ減少ガ現ハレテ居ル。コノ事實ハ結核症ノ發病經過ヲ深ク識ル上ニモ意義ノアル事デ又小兒期ニ於ケル結核感染ヲ減ラスニ努力スレバ全年齡ヲ通ジテノ結核死亡ヲ減少サセ得ルト云フ事ヲ明カニ物語ルモノデアル。（柴田抄）

10、産業勞働層ノ結核罹病竝ニ義務的肺檢診ノ制定ニ就テ

Ludwig Vajda

産業ノ發達ニ伴ツテ一ツノ甚ダ重要ナル國民層ガ必然的ニ結核豫防ノ上ニ特有ナル任務ヲ分擔スル樣ニナツタ。アル學者ハ結核死亡統計カラ見テ、産業發達ニツレテ結核症ハ增加スルト主張スルガ、結核症增加ノ見ラレルノハ衞生狀態ノ缺陷ニ對シテ改良ヲ怠ル場所ニ於テノ事デアツテ勞働者ノ健康保護ノ行屆イテ居ル所デハ決シテ然ラズ農村ヨリモ好イ狀態デアル。唯同一工場内ニ開放性結核患者ガ働ライテ居ルノハ甚ダ寒心ニ堪ヘヌ事デ速カニ之レヲ發見治療スルハ最モ緊要デアル。著者ハ一九二八年ニ工場勞働者ノ定期診察制ノ確立ヲ唱ヘタガ當時ハ之レニ留意スル者ガ無カツタ。今回ハ各種ノ工場ニ就テ何等自覺症狀ナキ勞働者一二〇〇名ヲ檢診シタ、ソノ中デ肺ニ病變アルモノ一二五名（一〇・四一％）肺門部ニ異狀アルモノ三四七名（二八・九一％）

デアツタ、コノ調査ニヨツテ發見サレタ罹患者ノ數ハ勞働者ニ對シ專門醫ノ義務的檢診制度ヲ定メル事ノ必要ヲ裏書スルモノデアル。（柴田抄）

11、小兒結核症ノ病理解剖

H. Kudlich.

小兒結核症例一三六ヲ剖檢シタ處ニヨレバ結核菌ノ侵入門ハ大多數（全例中一〇六）デハ肺臓デアツテ頸部咽頭ノ器關ノ初感染ハ、ソノ類度及ビ意義ニ於テ遙カニ下位ニアル、コノ成績ハコレ迄 Gohn 及ビソノ學派ニヨツテ唱ヘラレタ事實ヲ實證スルニ反シ、Schulz ノ臨牀的ニモ病理解剖的ニモ支持サレナイ所説ト相反スル。著者ハ解剖的ニ淋巴腺ノ變化ノ無イ肺ノ初期病竈ヲ有スルモノ三例ヲ見タ、ソノ内一例ハ石灰化シタ寄生蟲デアリ他ノ二例ハ陳舊ナ石灰化シタ不全性ノ初期變化群ニ屬スルモノデアツタ。Moll ガ乳兒ノ遺傳結核症ニ特有デアルト云ツタ大結節性ノ結核症ハ見當ラナカツタ、一次性ノ腸結核症ハ三例アツタ。淋巴腺カラノ内因性再感染ハ七例デ何レモ年長小兒ニ見ラレタ、ソノ病型ノ所見ハ Gohn ノ淋巴腺性再感染ヲ Fortglimmen（燻燃）トスル見解ト一致スル。（柴田抄）

12、大結節性肋膜結核症ノ病例

J. Gwerder u. L. Kalmer.

Neumann ガ初メニ記述シタ大結節性乾酪性肋膜結核症ノ一例デアル。既往歴カラコノ例ノ原因ヲ考ヘルト人工氣胸ニ關係ガアル。今後氣胸療法ノ流行ニツレテカヽル大結節性肋膜結核症ハ屢〻起ルデアラウ、之レヲ豫防スル爲ニハ肋膜ニ新ラシイ滲出液ノアル場合ニ氣胸ヲ行ハナイ事及ビ氣胸ヲ止メルニハ肋膜炎ガ全ク消退シタ時ニ於テスル樣ニ注意スベキデアル。（柴田抄）

13、肺結核ノ臓器療法ニ就テ

F. Mattausch.

第二回目ノ報告デアル。卽チ前回ハ Splenotrat ト稱スル脾臓製劑ガ結核患者ノ盜汗、食慾不振、頭痛及倦怠ニ好影響ヲ有シ、其ノ他執拗ナ發熱モ下降シタリ又喀痰ノ量モ減ズルト報告サレタノガ、今回ハ尙多數ノ例（一四〇）ニ依ツテ其ノ治療效果ヲ認メ、新鮮ナ浸潤性「シューブ」竈モ本劑ヲ用フルト非常ニ速カニ消散シ、臨牀的ニモ、「レントゲン」デモ所見ヲ認メナイマデニ到ルト云フ。（小林芳夫抄）

14、非特異性脂肪體ニ依ル肺結核ノ療法

Ernst Paulsen.

非特異性脂肪體ヲ用フルト結核菌ノ脂肪ノ抗原性ニ適應シテ脂肪抗體形成ガ高メラレル。而シテ菌ノ脂肪ヤ類脂肪體ニ對シテノ防禦力ノ增加卽チ Fettstoffabwehrkräfte, Antilipoide, Lipase, lipolytischen Fermente 等ノ增加スル事ハ、結核性組織ニ對シテハ特ニ意味ガアル。著者ハ Gamelan (Lipomykol) ト云フ脂肪體ヲ（或ハ注射ニヨリ或ハ塗擦ニヨリ）結核患者ニ用ヒテ非常ナ好影響ヲ認メテキル。Gamelan ノ供給ガ赤血球沈降反應ニ及ボス影響モ、漸ク最近ニナツテ報告セラレタノデアルガ、數ケ月ニ亘リ脂肪供給ヲ續ケテキルト、沈降價ハ減少スル殊ニ纖維性增殖型ニ於テソレガ認メラレルガ、滲出性傾向ノアルモノデモ、沈降價ハ小サクナルト云ハレル。而シテ臨牀的ニモ、盜汗消失、食慾增進、體重增加ガ起ル。又咳嗽、喀痰ノ量モ減少スル、又著者ハ小供ニ就テ同ジヤウナ成績ヲ經驗シテキル。小供デハ脂肪體供給ノ效果ガ非常ニ速カデアル。夫レハ全身吸收力ノ關係ガ非常ニ好都合デアルカ、恐ラクハ又小兒ノ全酵素的作用ガ成人ノ夫レヨリモ容易ニ影響ヲ受ケルタメデアラウ。（小林芳夫抄）

15、結核ノ化學療法

Mangan ト Beryllium salz ヲ用ヒタル實驗的海猪結核ノ影響

O. Gessner und K. Siebert.

Walbum ニ依ルト「マンガン」鹽ハ非經口的ニ用フルト、自働的免疫ヲ受ケタ動物デハ抗體形成ガ高マルバカリデナク、家兎ノ實驗的結核ニ好影響ヲ及ボス事ガ出來ル。又 Walbum ハ、四十二種ノ色々ナ金屬鹽ノ内デ唯「マンガン」ト「カドミウム」鹽ノミガ家兎ニ於テ此ノ好影響ヲ及ボスモノダト云フ事ヲ見出シタ。Walbum 以後 Mangan-und Beryllium salz 或ハ Manganchlorür ノミヲ以テ結核患者ヲ治療シタト云フ最初ノ報告ハ Helms und Lunde ニ發シテキル。著者等モ此ノ報告ニ誘起セラレテ、Mangano-und Beryllium chlorid ヲ同時ニ用ヒタ場合又 Manganochlorid ノミヲ用ヒテ實驗的海猪結核ニ對スル影響ヲ檢シタノデアル。而シテ次ノ如ク總括シテキル。「ツベルクリン」樣ノ接種素ト金屬鹽($MnCl_2+BeCl_2$, $MnCl_2$ ノミ)トヲ併用スルト一時的デハアルガ著シク好影響ガ見ラレル。$MnCl_2+BeCl_2$ ノ量ヲ尚增加スルト海猪ノ結核ノ經過ヲ早メルモノデアッテ、是等實驗ノ成績ハ實驗的動物結核ノ金屬療法ニ就テノ Walbum ノ成績ノ辯駁ト見做スベキデハナク、金屬鹽療法ニハ正鵠ナ用量ガ最モ重要ナ因子トナルト云フ證據ト解スベキデアルト。

（小林芳夫抄）

16、結核治療ニ於ケル榮養療法

P. Rehfeldt.

著者ハ表題ノ如ク結核ノ榮養療法ニ就テ詳細ニ記述シ尚ザウエルブルッフ、ヘルマンスドルフェル、ゲルソン氏食餌療法ニモ論及シ、次ノ如ク總括シテキル。

（一）「ヴィタミン」ト鑛物鹽ノ豐富ナ點デハ優レテキルザウエルブルッフ、ヘルマンスドルフェル、ゲルソンノ減食鹽食餌モソノ組成ト供給方法ニ於テハラーマン氏食餌ヲ少シ變更シテ用ヒテキルノデアル。（二）結核患者ノ「ヴィタミン」需要ハ大キナモノデアル。而シテ臨牀的ニ觀察シテモ亦動物實驗ニ於テモ、肝油ヲ用フレバ、「ヴィタミン」供給カ高メラレルノデ結核個體ノ新陳代謝ヲ高メ又其ノ個體ノ防禦力ノ亢進スルト云フ事ハ肝油療法ニ際シテ古イ經驗ガ物語ルモノデアル。（三）「カルチウム」ヲ多量ニ給與スルト、恐ラク「カルチウム」ガ充分ニ蓄積スルタメデアラウカ血管壁ノ Abdichtung ガ起リ白血球ノ喰細胞力ガ增加シ、從テ此ノタメ感染ニ對シ抵抗力ハ亢進シ而シテ組織ノ炎症準備力（Entzündungsbereitschaft）ト云フヤウナモノガ衰ヘル。其他「カルチウム」鹽ハ迷走神經ニ抑制的ニ働キ又血液凝固ヲ促スモノデアル。鑛物ノ效果ハ全ク疑ハシイモノデアル。（四）食餌ノ減食鹽ノ意味ハ尚ホ說明ヲ要スル事デアル。（五）香味料ヲ多量ニ用フルニモ不拘、敏感ナ患者カラハ不愉快ナ不味イト思ハレル減食鹽食餌ハ時ニヨルト二、三ノ患者ニ食慾減退ヲ起サセ而シテ其ノタメニ全身ノ體力ガ衰ヘテ狀態ガ惡化スル事ガアル。（六）良好ナソシテ可成リ一定シタ體重增加ハ食餌療法ヲ行ツタ者ノミニ見ラレタ、是等ノ患者ニハ同時ニ肝油製劑ガ與ヘラレテキル。ケレドモ普通食デ養ハレ、ソシテ肝油ヲ與ヘラレタ患者トノ間ニ全然相違ガ現ハレナカツタ。食餌ニ食鹽ヲ附加シテモ體重增加、治癒傾向ニ少シモ不利ナ影響ヲ與ヘルモノデナイ。鑛物ハ體重ニ對シテハ何ノ效果モナイモノデアル。（七）溫度ノ上昇ハ每常影響サレナイガ、月經前溫度上昇ハ多樣ニ有利ナ影響ヲウケル。（八）喀痰量ハ食餌療法ヲ受ケタ者ノ一部分ニ於テノミ減少シ、結核菌ガ

完全ニ而シテ持續的ニ消失シタノハ唯二名ノ患者ニ於テノミ確メラレタ、(九)赤血球沈降速度ハ單獨ノ例ニ於テノミ良好ノ經過ヲ示シ、唯一例ニ於テ八ケ月デ正常値ニ達シタノガアル。(十)食餌療法中ニ肺結核ノ臨牀的治癒ハ唯一例ニ於テ達セラレタノミデアル。多クノ患者モ著シク良好ニ向ツタ。食餌療法ハ今日マデ保持サレテキル治療法ヲ補フベキモノデナイガ、之レニ適シタ患者ニハ見ルベキ效果ガアル。(十一)食餌ハ將來病人ノ需要ニ適スルヤウニ組立テラレ子バナラナイ、而シテ此ノ治療法ニハ主トシテ如何ナル患者ガ適スルカト云フ事ガ、イツカハ說明サルベキ筈デアル。(小林芳夫抄)

17、七年間ヲ通ジテノ結核患者ノ「サノクリジン」療法ノ成績

Knud Secher.

治療患者ヲ六群ニ分チ、第一群ハ菌ヲ證明スルガ輕症デ總テ臨牀的ニハ健康ト見做シ退院シタモノデ、僅カ一〇例ニ過ギヌ。第二群ハ菌ヲ證明シナイ輕症デ、臨牀的健康トシテ退院シタモノデ、五〇例アル。其ノ內三三例ニ就テ知ル事ガ出來タノデアルガ、二例ノ再發ガアリ、其ノ一例ハ死亡シ他ハ療養所デ治療ヲ受ケテキル。又一九二八年ニ一〇名ニ就テノ通知ヲ得タガ、其ノ內一名ハ罹病シテキタ。輕症患者ノ以上ノ二ツノ群デハ治療ガ最モ良ク行ハレタト思フモノヽミデアルガ、失望スルヤウナ例モ勿論經驗シナケレバナラヌ。群別ヲ誤ツタ事ヤ、症例ヲ輕視シタ事ナドモ亦成績ニ影響ヲ及ボシテ來ル。以下菌ヲ證明スル重症、證明セザル重症、最モ重症ナ例、肋膜炎、腺結核及ビ十五歲以下ノ少年等ノ各群別ニ就テ報告シ、Sanocrysin ハ結核治療ノ補助トシテ價値ノ有ルモノダト云ツテキル。(小林芳夫抄)

18、肺結核ノ Solganal 療法竝ニ金劑及「レ」線照射併用ノ刺戟療法

Georg Hacker.

著者ガ金製劑 Solganal ヲ用ヒテ七八例ヲ治療シタ成績ヲ詳細ニ報告シ次ノ如ク結論シテキル。卽チ實際ニ害ヲ受ケル事ナシニ、金療法デ良キ結果ヲ得タイト思フナラ、嚴密ニ適應症ヲ定メ用量ニ細心ノ注意ヲ拂フ事ガ最モ重要デアル。此ノ二點ヲ顧慮スレバ Solganal ハ多クノ場合良キ結果ヲ齎ラスモノデ、被害ノ危險ハ非常ニ少イモノデアル。尙ホ金劑ヲ用フルト同時ニ肺ノレ線照射ヲ併用スルト其ノ結果ハ期待以上ニ著シク良クナル事ガアルト。(小林芳夫抄)

19、結核ニ於ケル補體結合反應及ビ血淸不安定度反應ノ使用價値ニ就テ

Georg Ivanovics.

補體結合反應ハ結核ノ血淸學的反應ノ中デ、特異ノ抗體ノ證明ニハ最モ確實デアルガ、病機ノ活動性ハ充分ニ示サナイ。夫レニ反シ活動性ヲ示ス血球沈降反應ヤ種々ノ血淸殊ニ血漿不安定度反應ハ結核ニ特異ノモノデハナイ。著者ガ本研究ヲ行ツタ目的ハ、補體結合反應ト活動性ヲ示ス Darányi ノ血淸不安定度反應トヲ平行試驗シ、臨牀上ノ使用價値ヲ比較セントスルニアル。著者ハ二〇〇例ニ就テ檢査シ次ノ如ク結論シテキル。卽チ Darányi ノ血淸不安定度反應竝ビニ血淸「レフラクチオン」ノ測定ハ肺結核ノ診斷及ビ豫後ノ臨牀的觀察ヲ補足スル上ニ於テ、甚ダ使用ニ足ル補助方法デアル。是等ノ操作ハ非常ニ簡單デアルノト、肺結核ノ滲出型デハ每常、纖維性病型デハ症例ノ2/3ニ反應ガ出現スル事ニ於テ、實施ノ容易デナイ補體結合反應ヨリモ好ンデ應用スル。其ノ補體結合反應モ唯症例ノ五〇乃至七〇%ニ於テ陽性結果ヲ

示シ、其特異性ト云フノモ亦或ル限局サレタ特異性ニ過ギナイノデアルト。

（小林芳夫抄）

20、結核患者ニ於ケル窒素代謝機ノ特徴

S. Leites u. D. Ebitsch.

結核症ノ患者ニ「ペプトン」負荷ヲ行ツテ血液ノ R.-N 及ビ尿ノ窒素量ノ曲線ヲ研究スルト次ノ様ナ反應型ガ現ハレル。a、正反應、血液 R.-N ハ上昇シ尿ノ窒素排泄ハ不變或ハ増加スル、b、逆反應、血液ノ R.-N ハ低下シ尿ノ窒素排泄ハ不變又ハ低下スル、c、遲鈍反應、血液ノ R.-N ノ微弱ナル變化 d、混合反應 R.-N ノ上昇期ト下降期トガ現ハレルモノ。

以上ノ反應型ト結核症ノ臨牀上ノ特徴トノ關係ハ正反應ハ結核症ノ代償機能完全ナル病型ノ者ニ最モ多ク現ハレ、逆反應以下ノ反應型ハ代償機不全或ハ不能ノ病型ノ場合ニ見ラレル。

（柴田抄）

21、Barmelweid 療養所ニ於ケル人工氣胸例

（一九一二年—一九二七年）

Otto Arni

患者總數二三三三名カラ氣胸療法ニ選ンダモノハ三三五名デ一四％ニ當ル、ソノ中デ實施スル事ノ出來タノハ二五〇例七五％デアル。女性デハ左側ガ多ク男性デハ右側ガ多數デアツタ。送氣中ノ事故ハ輕イモノデハ皮膚及ビ縦隔竅ノ氣腫、小出血、一過性ノ失心及ビ「テタニー」發作等デアリ、他ニ「ルフトエムボリー」デ死亡シタ者一名デアル。氣胸ヲ行フト共ニ一般療法モ必要デアリ又「ツベルクリン」モ有效デアル、著者ハベラ子ックノ「ツベルクリン」ヲザーリー氏法デ使用スル事ヲ推奬スル。治療中或ル時期ニ肋膜滲出ヲ來シタ例ハ六一％デ長期間氣胸ヲ續行シタ者デハ滲出ノ起ラヌ例ハ稀レデアル。尚ホ滲出ノ起ツタモノ、一三％ハ膿胸ニナツタ。肺結核症ガ治癒スル迄氣胸ヲ續ケタモノハ一一％丈デアル。成績ハ早期ノ效果ハ殆ド總テニ見ラレタ。一九一二年カラ一九二四年迄ノ間ニ氣胸ヲ行ツタ者一七八名デハ一九二九年四月ニソノ二六％ガ生存シ二〇％ハ作業能力ヲモツテ居ル。之レニ對シ氣胸ヲ試ミテ實際ニ行ハナカツタ者六七名デハ生存者ハ僅カニ一〇％デアル。

（柴田抄）

22、滲出性肋膜炎ノ臨牀

殊ニ結核症及ビ年齢トノ關係ニ就ノ考察

Otto Gsell

滲出性肋膜炎ノ臨牀ニ關スル講義デアル、肋膜炎ト結核症及ビ年齢トノ關係ニ就テハ次ノ様ニ特説シテ居ル。

一五一例ノ滲出液ヲ「モルモット」ニ接種シテ結核菌陽性ノモノガ七五例（約五〇％）アツタ、動物試驗ガ陰性デアツテモソノ肋膜炎ガ結核性デ無イト定メル事ハ出來ヌ、他ノ臨牀所見カラ結核性ト確定サレルモノガ多數ニアル、一五乃至三〇歳ノ青年期ノ肋膜炎五五例デハ結核性ヲ證明シ得タモノ八七％又三〇乃至八〇歳ノ年長者三九例デハ七〇％ガ證明サレタ。肋膜炎ノ一〇乃至二〇％ハ結核症トノ直接關係ガ全ク不明デアルガ是等ヲ直チニ、特發性又ハ「ロイマチス」性肋膜炎トスルノハ不當デアル。

年齢デハ一六乃至二五歳ガ甚ダ多數デ最高ハ二一歳、二五歳以後ハ急ニ減ズル。軍隊デコノ年齢ノモノニ肋膜炎ガ多數ニアルノハ外因的要素ガ重大ノ作用ヲスルノデアル・肺又ハ淋巴腺ニ潛伏シテ居ル結核症ガ外因ニ誘發サレテ肋膜ニ占位スルノデアルガ夫レガ丁度年齢ニヨツテ肋膜ガ最モ大ナル素因ヲ持ツ時期ニ相當スル爲ニ一層容易ニ發病スルノデアルト。

（柴田抄）

23、混合感染ヲ起シタ氣胸滲出ノ手術ニ就テ

Hans Storz.

人工氣胸療法中膿胸ヲ起シタ場合ノ手術トシテハ Schede ノ方法ハ衰弱シタ患者ニハ重荷ニ過ギテ實施ガ困難ダカラ著者ハ Kirchner ガ推奨シタ處ノ膿胸閉塞ニ筋肉插入法ヲ行フ術式ヲ利用シテ氣胸腔ヲ塞グ事ヲ試ミタ。實施シタ例ハ一一名デ内一名死亡シ他ハ總テ好結果ヲ得タ。（柴田抄）

24、肋膜及腹膜滲出液ノ糖量ニ就テ

J. Herms

滲出液ノ診斷ハソノ形態及ビ細菌ノ檢査、蛋白纖維素ノ含有量ニヨッテ決メラレル。滲液中ノ細胞ノ總數及ビ多核白血球ハ炎症ノ强盛ナ時又ハ吸收ノ場合ニ增加スル、淋巴球ハ良性濕性肋膜炎ニハ特有デアルガソレ以外ニハ臨牀上意義ガ無イ、「エオヂノフィリー」ハ吸收ノ起ッテ居ル事ヲ示スケレドモ病氣ノ經過ニ關スル豫後ヲ示スモノデハナイ、蛋白量ノ多寡ヲ臨牀的ニ判斷スルノハ困難デアル、ソノ故ハ增加ハ炎症ニモ亦吸收ニモ起リ、吸收ノ場合ハ自家分解作用モ加ハルカラデアル。纖維素ノ增加ハ多クノ場合吸收ノ始マッテ居ル兆デアル。滲出液中ノ還元性物質ハ大部分「グリコーゼ」デアル、血糖量ガ滲液ノ糖量ニ及ボス影響ハ證明サレナイ、滲出液ノ糖量ハ血液ニ於ケルト同量ニアル事モアルガ或ル場合ハ甚ダ微量ノ事ガアル、一時性ノ竇内滲出液デハ慢性ノモノト反對ニ糖量ハ中等度又ハ高度デアル、腹膜炎ノ滲出液デハ糖ノ減少ヲ見ル事ハ稀デアル。（柴田抄）

25、斜角筋ノ切除ニヨリテ横隔膜神經捻除術ノ效果ヲ高ムル動物實驗及臨牀實驗

Kochs, Els u. Junkersdorf.

斜角筋ハ肋骨殊ニ第一第二ヲ擧上スルニ最モ强イ附屬筋デアル、コレヲ切除スル事ニヨッテ胸ノ上半部ニ一定度ノ靜止ヲ來サシメ得ルカラ著者等ハコノ手術ヲ横隔膜神經捻除術ト併用スル事ヲ試ミタ。先ヅ猿三頭ニ實驗ヲ行ッタガ何等ノ危險ナク術後モ不快ナ副作用ヲ起サズ目的ヲ達シタ、人ニ就テモ手術ハ困難デナク所要時間モ普通ノ捻除術ト變リハ無イ、コノ手術ニヨッテ胸廓上部ニ高度ノ萎縮ガ起リ「線ニヨルト胸腔上口ハ彎曲縮小シ肋間ハ狹クナリ二次的ニ側面全體ニ幾分カノ收縮ガ見ラレル。臨牀實驗ノ成績ハ良好デアル。適應症ハ横隔膜神經捻除術、補助、主トシテ肺上部ノ結核症デ氣胸ガ行ヘナイ場合又氣胸ヲ行ッテモ上部ニ索狀或ハ扁平ナ癒著ガアル場合、胸廓整形手術ヲ行ッタ時更ニ胸ノ上部ノ安靜ヲ得ントスル場合等デアッテ禁忌トスルハ下肺葉ノ結核症デ捻除術ノミデ充分靜止ガ得ラレタ時、兩側ニ病變ガアッテ他側ニ氣胸術ヲ行ハントスル場合等デアル。（柴田抄）

The American Review of Tuberculosis
Vol. XXIII, No. 1. 1931.

26、稀釋度ノ異ナル「ツベルクリン」ヲ用ヒテ行フ鑑別的「ツベルクリン」反應

John E. Blair and Walter I. Galland.

結核感染診斷ニ對シテノ補助トシテ、「ツベルクリン」反應ノ研究ハ重要ナル地位ヲ占ムルモノデアルトテ著者ハ、先ヅ本反應ニ關スル諸學者ノ研究及ビ說ヲ略述シテ、次デ、自己ノ實驗的研究ヲ詳細ニ報告シテキル。玆ニハ其ノ結論ダケヲ抄スル。

著者ハ强力ナル人型及ビ牛型「ツベルクリン」ヲ併用シテ、鑑別的量的「ツベ

ルクリン」皮内反應ヲ行ツタ。稀釋度ハ、マントー氏反應ニ於テ見ラレル反應度ニ相當スルヤウニシタ、而シテ幾階段ニモ稀釋ヲシタノデアルガ、「ツベルクリン」過敏性反應ハ殆ンド起ラナイ程度ニ弱クシタ。卽チ市販「ツベルクリン」ヲ一對一〇、〇〇〇カラ一對一〇、〇〇〇、〇〇〇ニ稀釋シタノデアル。尙ホ人型ト牛型トヲ併用スルコトニヨツテ一方ダケ用ユレバ往々起リ得ル偶然錯誤例ヲ除クヤウニシタ。

實驗例ハ小兒、成人ノ結核及ビ非結核例ヲ合シテ四七一デアル。一二一結核例中九〇・九％ハ、診斷的稀釋ノ「ツベルクリン」デ陽性ニ反應シ、九％ノミガ陰性デアツタ。三五〇ノ非結核例デハ九二・五％ガ、診斷上陰性ト見ナスコトガ出來、七・四％ガ診斷的稀釋デ反應ヲ呈シタ。二三ノ結核例デハ人型及ビ牛型「ツベルクリン」ヲ併用シタガ、四例（一七・三％）ガ、若シ一種ノ「ツベルクリン」ダケヲ用ヒテキタラ、誤ツタ成績ヲ示シタデアラウト思ハレタ。

以上ニヨツテ、鑑別的量的「ツベルクリン」皮内反應ハ、他ノ有力ナル方法ト併用スル時ニハ、確カニ結核診斷上ニ價値ヲ有スルモノデアル。而シテ其ノ正確度ハ、免疫學的又ハ、血清學的診斷法ガ一般ニ認メラレテキルト、ホゞ同程度デアル。時ニ誤ツタ偶然結果ヲ示スコトハアリウルガ、夫レハ人型、牛型兩「ツベルクリン」ヲ併用スルコトニヨツテ避クルコトガ出來ル。而モ本試驗方法ハ安全デアル。何トナレバ、「ツベルクリン」ハ夫レガ有效デアル最小量ヲ用ヒテ、局所反應ハ勿論全身反應ヲ避クルタメニ、吸收ガ出來ルダケ緩徐デアルヤウニ用ユルカラデアル。

尙ホ一對一〇〇、〇〇〇又ハコレ以上ノ稀釋度デノ陽性反應ヲ、活動性結核トシ、一對一〇、〇〇〇ノ稀釋度及ビ夫レヨリ以下ノモノデ反應スルモノハ、停止性又ハ治癒結核ト著者等ハ見做シテキルノデアル。（佐々抄）

27、三千五百例ニ就テ行ヒタル「ツベルクリン」皮内反應試驗成績ヨル推定セル小兒ニ於ケル結核感染ノ狀態

Lloyd B. Dickey and Roland P. Seitz.

著者等ガ一九二五年ニ桑港結核協會ノ援助ノ下ニ行ヒタル試驗デアル。著者等ハ先ヅ、ピルケー皮膚反應ガ正確ナ結果ヲ示サナイコト。往時ノ試驗成績ハ必ズシモ直チニ今日ノ成績ト比較シ得ナイコト、アル市又ハ地方ノ結核死亡率又ハ罹患率ヲ以テシテハ直チニ結核感染ニ對スル狀態ヲ推シ得ナイコト等、及ビ各學者ノ小兒ノ結核罹患狀態ヲ、「ツベルクリン」反應デ檢シタ成績及ビ夫レニヨル夫等學者ノ說、尙ホ其ノ說ニ對スル議論等ヲ述ベテ、自己ノ檢査成績ニ就テ所說ヲ述ベテキル。今玆ニハ結論バカリヲ記スル、卽チ（一）三五〇〇例ノ「ツベルクリン」皮内反應成績ニ就テ本論文ハ述ベタノデアル。（二）本試驗成績ニヨルト結核感染率ハ年齡ニ比例シテ大トナル。（三）桑港附近デハ十四歲卽チ成人ニ近ヨツタ年齡デハ、結核感染率ハ四六・六％ヲ示ス。（四）コノ率ハ同一方法デ檢査シタ他ノ住民ニ於テ得ラレタモノニ匹敵シテキル。（五）ピルケー氏「ツベルクリン」反應試驗ハ、誤ツタ成績ヲ示スコトガアルカラ、此ノ種ノ研究ニハ不可デアル。（六）凡テノ社會住民ニ就テ其ノ小兒ノ「ツベルクリン」檢査ヲ反復スルコトハ、結核感染ニ小兒ガ露出サレテキル狀態ヲ知リ、以テ夫レヲ豫防スル上ニ價値アルコト、思ハレル。（佐々抄）

28、「ツベルクリン」中ノ活動性物質ノ化學的生分

Florence B. Seibert and Betty Munday.

結核動物ニ見ラレル「ツベルクリン」皮膚反應ハ其ノ中ニ含マレオル類蛋白質ニ依ルモノデアルコトハ多クノ研究ガ示ス通リデアル、此ノ考ヘヲ今更變化スル必要ハナイノデアルガ、コノ特殊作用ハ單一物質ニ依ツテ惹起サレルモノデナイト云フ證明ハ相當ニ多イ。夫レハ「ツベルクリン」ヲ化學的操作ニヨリ、其ノ類蛋白質ヲ分離シテ、各々異ナル性質ノモノヲ取リ出シテ見レバ明ラカデアル。依ツテ著者ハ更ニ夫レヲ追究シタノデアツテ、本論文デ其ノ操作方法、實驗方法及ビ其ノ成績ニ就テ詳述シテキル。

今結論バカリデ抄スルト次ノ通リデアル。

(一)「ツベルクリン」類蛋白質ノ「ツベルクリン」作用、例ヘバ結核動物ニ見ラレル皮膚反應ノ如キハ、類蛋白分子ノ特殊部分ノ作用ニ歸シ得ルヤウデ、シカモ夫レハ、類蛋白質ヲ加水分解スル時ニ先ツ最初ニ得ラレル(而シテ後ニハ發生スルコトガナイ)、分解產物デアルラシイ反應ヲ起シウル「ツベルクリン」類蛋白ノ最小分子ハ、比較的少ナイ分子量ヲ有スルモノデ、一〇〇〇乃至二四〇〇或ハ夫レ以下デ、半透膜ヲ通過スルコトガ出來ル。

(二)類蛋白質バカリカ、恐ラクハ又夫レノ最初ノ分解產物ノミガ、類蛋白炭水化複合物デ、免疫シタ動物血清デ、「プレチピチン」反應ヲ起スコトガ出來ル。

(三)結核動物及ビ健康動物ニ對スル「ツベルクリン」ノ致死作用ハ、恐ラク類蛋白質ノゴク初期ノ分解產物ガ關係ヲ有スル。

(四)多糖類ハ主トシテ、「ツベルクリン」類蛋白質ノ初期分解產物ト結合シテ而モ水洗ニヨツテハ離レナイ、唯PH四・八ニ於テノミ分離スル。「ツベルクリン」中ニ存スル、多糖類ノ凡ソ四分ノ三量ハ前記ノ如ク結合シテキル。殘リノ部分ハ類蛋白質トハ結合シテナイノミナラズ、操作中ニ用ヒラレル、最モ小サイ孔ヲ有スル濾紙デモ通過スル。

(五)之ノ知見カラシテ、强力ナル「ツベルクリン」類蛋白質ヲ多量ニ粉末ノ形ニ於テ取リ出スコトガ出來ル。コレハ實際上完全ニ水溶性デシカモ不變性デアル。而シテ窒素ヲ一六%、多糖類ヲ二・七%ニ含ンデキル。僅カ〇・〇一瓩デ、結核天竺鼠ニ最强度ノ皮膚反應ヲ惹起シ、五瓩ヲ用ユレバ、同一動物ヲ二十四時間以內ニ殺スコトガ出來ル。而シテ、「ツベルクリン」ノ類蛋白炭水化複合物デ免疫シタ家兎血清ニ對シ高度ノ「プレチピチン」値ヲ示ス。但シ健康天竺鼠ニ對スル毒性ハ非常ニ弱度デアル。

(佐々抄)

29、實驗的「ツベルクリン」肺炎

Alfred Larson and Esmond R. Long.

結核性肺炎ノ際ノ肺氣胞內ノ急性滲出性變化ハ、結核菌ト菌產生物トニヨル「アレルギー」ノ現レデアルト一般ニ思惟セラレテキル。又「ツベルクリン」反應ノ研究ノ結果、是等滲出性反應ハ菌ノ類蛋白質ニヨルモノデ、コノ類蛋白質ガ、「ツベルクリン」反應ヲ惹起スル特異物質デアルト一般ニ信ゼラレテキル。

又「ツベルクリン」類蛋白質ガ肺ニ急性滲出性變化ヲ惹起シ得テ、激シイ場合ハ壞死ニマデ進ムコト相像セラレル點デアルガ、結核菌類蛋白質ガ實際カヽル場合如何ナル役ヲ演ズルカノ證明ハ殆ンドナイ。

又一方デハ結核菌ヲ結核動物又ハ非結核動物ノ氣管內ニ注入シテ起ル、肺ノ變化ニ就テノ究究ハ多々アツテ、結核動物デモ、非結核動物デモ同樣ニ肺炎性變化ガ見ラレル、從ツテ「アレルギー」ノ有無ハ是等肺炎ノ成立ニハ絕對的ノ條件デハナイ。但シ「アレルギー」ガ存スル動物デハ、夫等ノ變化ガ高度デアル、而シテ、コレハ强毒菌デ惹起セラレルガ菌量ガ少ナイト起ラヌ、等ハ

凡テノ學者ノ一致シタ所見デアル。

著者ハ茲ニ於テ結核菌ノ代リニ、「ツベルクリン」ヲ用ヒテ同一ノ實驗ヲ行ツタノデアル、著者モ、結核動物ト、非結核動物トノ間ニハ豫期シタホドニハ著明ニ變化ノ相違ヲ見ナカツタ、兩動物間ニ見ラレル差ハ量的デハナイト云ツテキル、而シテ著者ハ各動物ニ就テノ變化ノ有樣ヲ詳述シテ、人類ニ於ケル結核性肺炎モ同樣ナルモノデアルト相像スベキダトシテキル。（佐々抄）

30、結核菌ノ有スル生化學的性質ノ二三

Morton c. Kahn and Helen Schwarzkopf.

鳥型菌、牛型菌及ビ人型菌ニ就テ培養上ヨリシテ表題ニ就テ實驗研究ヲシタ報告デアル。（佐々抄）

31、生體外ニ於テノ結核菌ノ溶解

H. J. Corper.

本論文ハ犬ノ臓器ヲ取リ出シテ、夫レニ結核菌ヲ血管内ニ注入シテ、孵卵器中ニ於テ、夫レノ溶解狀態ノ研究報告デアル。（佐々抄）

32、結核ニ於ケル免疫ト生物化學トノ間ノ二三ノ關係

C. H. Boissevain

著者ハ臨牀上ノ事實ト、結核菌培養實驗トヨリシテ、結核菌繁殖ニ必要ナ酸素、窒素其ノ他ノ物質ノ關係ヲ述ベテキル。（佐々抄）

33、上皮樣細胞

R. S. Cunningham and Edna H. Tompkins.

本論文デハ、結核組織ニ見ラレル上皮樣細胞ノ發生機轉作用、他種細胞等トノ關係等ニ就テ、超生體方法（Supravital Method）ニ依ル病理學的研究ガノベラレテキル。（佐々抄）

34、結核動物ニ於ケル單核細胞增加ニ就テノ實驗

J. T. Geiger

動物體内ニ或物質ヲ注入スル時ニハ、末梢血管血液中ニ著明ノ白血球增加ガ來ルコトハ既ニ古クカラ知ラレテキル事實デアリ、コレニ關スル文獻モ多々アル、著者ハ結核動物デハコノ關係ガ如何デアルカヲ、天竺鼠ヲ結核トシ、一群ヲ對照トスル、而シテ、大腸菌乳劑ヲ注射シテ前後ノ白血球ノ狀態ヲ檢査シタノデアル、兩群トモ注射ニヨリ著明ノ白血球增加ガ來リ、中性多核細胞增加ヲ伴フ、唯異ナルハ單核細胞ガ示ス反應デ、對照動物デハ夫レノ減少ヲ示ス例ガ大多數デアルノニ、結核動物デハ著明ノ增加ヲ示スト云フノデアル。著者ハ其ノ試驗方法成績等ニ就テ詳細ニ記述シテ、コレハ結核動物ト非結核動物トノ著明ナル反應ノ相違デアツテ、コノ事實ヲ臨牀的上ニ用ユレバ化膿性傳染疾患ノ假面ノ下ニアル、結核性過程ヲ發見スルコトガ可能デアルト云フテキル。（佐々抄）

35、「ヴィタミン」缺亡ノ影響ノ患者ニ就テノ觀察

Burgess Gordon and Elizabeth Flanders.

種々研究セラレタ「ヴィタミン」問題ヲ如何ニ臨牀上ニ應用スルカハ頗ル、熟慮ヲ要スルコトデアル、動物試驗ノ結果ガ直ニ臨牀上ニ價値アルヤ否ヤハ斷言出來ナイガ、「クループ」病、脚氣等ニ關スル研究カヲ見レバ、「ヴィタミ

ン」ノ作用ハ殆ンド疑問ヲオク餘地ガナイ、茲デ著者ハ主トシテ肺結核患者、其ノ他ノ患者ノ多數ニ就テ、「ヴィタミン」缺亡ニ關シテ臨牀的觀察ヲ行ツタノデアル。其ノ結果トシテ、「カロリー」問題ガ、「ヴィタミン」不足問題ヨリヨリ重要ト考ヘラレル。「ヴィタミン」D缺乏ハ小兒期ニハ著ハレルガ、コレハ永續的ノモノデハナイラシイ、肝油ヲ與ヘテモ結核組織ノ石灰沈著ニ何等ノ影響ガ見ラレナイノハ、普通食餌デ充分ノ「ヴィタミン」Dガ補充サレテキルタメカ、又ハコレガ特別ノ作用ヲ有シナイカヲ思ハセルモノデアル。肝油ガ種々ノ呼吸器疾患症狀ニ效アルノハ、「ヴィタミン」A補給ガ特殊的價値アルヲ思ハセル云々。ト述ベテキル。

（佐々抄）

36、末期肺結核患者ニ向ツテノ「アミタール」曹達（Sodium amytal）ノ筋肉内應用

Homer H. Cherry.

結核患者ノ末期ニ於テハ鎮靜劑及ビ催眠劑ノ使用ガ、必要止ム可ラザル場合ガ少ナクナイ。コレニ對シテ一般ニ用ヒラレル「オピウム」及ビ其ノ製劑ハ習慣作用ヲ起ストカ、胃腸運動障碍ヲ來ストカ、其ノ他ノ忌ムベキ副作用ヲ伴フノガ不快デアル、シカルニ「アミタール」曹達ハ全然カヽル副作用ナシニ「オピウム」ト同等ノ作用ヲ有スルカラ、末期患者ノ鎮靜、催眠劑トシテハ最モ合理的デアルトテ、著者ハ其ノ實驗例ヲ揭ゲテキル。

（佐々抄）

37、南部二都市ニ於ケル結核ニ關スル一般的保護事業ノ記述

Ernest T. Krueger.

本文ハ Nashville 及ビ Birmingham 兩市ニ於ケル結核ニ關スル保護事業ノ記述デアツテ、（一）學校衛生（體格檢査、學校看護婦、大氣療法室）。（二）療養所（病院、豫防院及ビ大氣療養「キャンプ」。（三）教育。（四）家庭保健（家族救濟事業、社會保健事業、職業問題）。等ニ關シテ詳細ニ云ハレテキル。

（佐々抄）

結核專門外雜誌

38、再ビ結節性紅斑ニ就テ

小池藤太郎（岡山醫學會雜誌第四八九號）

著者曾テ本誌上ニ報告セシ所ノモノハ結節性紅斑ノ稍〻慢性ノ經過ノモノヲ以テ一般ニ本症ト結核トノ關係ニ就キ尙ホ斷定的ノ結論ヲ下スニ至ラザリキ然ルニ最近本症ノ定型的二例ニ就キ而モ發病全ク新鮮ナルモノニ於テ、仔細ニ其ノ組織像ヲ探究シ、之ニ於テモ結核樣變化ヲ證明シ、以テ益〻本症ト結核トノ密接ナル關係アルコトヲ確信スルニ至リ、尙ホ一方 Bazin 氏硬結性紅斑ノ二—三ノ例トニ於テ精密ナル組織的檢査ヲ施シ兩者ノ移行型トモ思惟スベキ所見ニ接セラレシヲ以テ詳細ナル研究報告ヲナサレシモノニシテ左ノ如キ結論ヲナセリ。

定型的臨牀症狀ヲ呈セシ初期結節性紅斑ノ二例ニ就テ仔細ニ其ノ組織像ヲ檢スルニ靜脈壁ノ肥厚及ビ細胞浸潤、淋巴管ノ擴大、眞皮及ビ皮下組織中ニ於ケル多核白血球並ニ淋巴球ノ浸潤ノ外、屢〻組織內ニ結核性變化ヲ證明ス、發病極メテ早期ノモノニ於テハ、單純性炎症性變化ヲ其ノ主ナル所見トナスモ、而モ既ニ上皮樣細胞ノ群簇ヲ示スモノアリテ、之ニ淋巴球並ニ極メテ少數ノ巨大細胞ヲ混ゼルモノアリ、是等ノ結核變化ハ一般ニ發病時日ヲ久シク

經過セルモノ程顯著ナリ、之ヲ Bazin 氏硬結性紅斑ノ組織的所見ト比較スルニ、兩者ノ間ニ根本的ニ何等相違スル所アルヲ知ラズ、臨牀上竝ニ組織的ニ兩者ノ移行型又ハ混合型トモ看做スベキモノアリ。

尙ホ藥劑ノ兩疾患ニ及ボス效果ヨリ觀ルモ、二者ノ間ニ酷似セルモノアルヲ以テ兩疾患ノ間ニ境界ノ判然タラザルモノアリ、由是觀之、結節性紅斑ハ結核ト極メテ密接ナル關係ヲ有スルコトハ疑ナク、少ナクトモ吾人ガ臨牀上結節性ト思惟スベキモノニシテ而モ組織學上ヨリ觀ル時ニハ結核疹ニ屬スルモノアルコトハ確實ナリト信ズ。

（加藤抄）

39、結核菌分離培養法トシテペトロフ、ホーン竝ニペトラニアーニー培養基ノ比較試驗

織畠秀男（熊本醫學會雜誌第七卷第一號）

著者ハペトラニアーニー培地ヲ稍〻變形シ又、ホーン培地ニモ凝固溫度、時間ノ上ニ於テ稍〻變形ヲ行ヒテ試驗ニ供セリ。可檢材料トシテ喀痰一瓩ヲ用ヒ、之ニ五%硫酸水一〇瓩ヲ加ヘ孵卵器內ニテ三〇分間作用セシメタリ。試驗ニ供セル喀痰新鮮ナルモノ一二例ノ二—三日經過セルモノ一二例、五—六日ノ陳舊ナルモノ一三例、計三七例ナリ、各培地ニ於ケル結核菌發育狀況ハ一般ニ新鮮ナル材料程、速ニ且ツ旺盛ニ發育ス、ペトラニアーニー培地ハ製法簡易結核菌聚落ノ發見容易、且ツ發育ノ迅速旺盛ナル點、竝ニ雜菌ノ混入少ナキ點等總テニ於テ最モ優秀ナリ。新鮮材料ハ勿論、陳舊ナル可檢材料ニモ適ス、ペトロフ培地ハ雜菌發育ノ阻止作用强キ點ニ於テホーン培地ニ優ルモ結核菌發育ノ點ニ於テハ却テ之ニ劣ル。

（池上抄）

40、肺結核手術ノ赤血球沈降速度ニ及ボス影響第一回報告、臨牀的研究

小坂政一（十全會雜誌第三六卷第一號）

著者ハ、主トシテ昭和四年度ニ於テ手術的療法ヲ受ケタ肺結核患者ノ多數ニ就テ赤沈速度ヲ檢査シ、ソシテ手術的肺結核療法ガ、本反應ニ及ボス影響竝ビニ豫後トノ關係等ニ就テ研究シ次ノ如ク結論シテキル。

（一）結核性諸疾患ニ於テハ赤沈速度ノ促進ヲ認メ（一六粍乃至四七粍）、骨、關節ノ結核ニ於テハ下垂膿瘍ヲ有スルモノハ之ヲ有シナイモノニ比シテ著シク促進スル。

（二）肺結核患者ノ平均赤沈速度ハ四二・四粍、合併症ノアルモノハナキモノニ比シテ僅カニ促進スル。病型ニヨツテ分ケルト萎縮型九・四粍　增殖型四一・九粍、混合型五三・七粍、滲出型六四・七粍デアル。

（三）橫神捻除術後ハ六三—七〇%ハ赤沈速度遲延シ、增殖型、混合型、滲出型ニ著シイ。外科的氣胸竝ビニ肺剝離ニ於テハ五〇—六七%遲延シ、增殖型ニ著シイ。胸廓成形術ニ於テハ第一回、第二回手術共ニ術後ハ六〇—八五%遲延シ、混合型ニ於テ最モ著シイ。何レノ手術モ術後赤沈速度ノ遲延率ハ時日ヲ經過スルニ從ヒ上昇スル。

（四）合併症ノ手術後モ赤沈速度ハ術前ニ比シテ遲延スル。遲延率ハ時日ノ經過ト共ニ漸次上昇スル（五八—七七%）。

（五）豫後ト赤沈速度ノ關係ハ、手術ニヨツテ全治或ハ輕快シタ肺結核患者ノ八〇%以上ハ赤沈速度ノ漸次遲延スルノヲ見、未治及ビ死亡例ハ遲速相半バス。

（六）赤沈速度ハ肺結核患者喀痰中ノ結核菌數、彈力纖維ノ消長及ビ白血球像

ノ變動ニ略ボ平行スル。

（小林抄）

41、肺結核ノ外科的手術ニ關スル病理解剖學的研究竝ニ其臨牀的意義

窪田忍（十全會雜誌第三六卷第一號）

横隔膜神經捻除、外科的氣胸術、肺肋膜剝離術、ザ氏胸廓成形術等諸種ノ外科的療法ヲ加ヘタ肺結核デ病理解剖ヲ行ヒ得タ一五例ニ就テ肉眼的竝ニ病理組織學的ニ詳細ニ檢索シタ成績發表デ、著者ハ次ノ如ク結論シテキル。卽チ前記諸種ノ手術法ニ依ッテ患肺ヲ機械的ニ縮小セシメル時ハ、肺結核ニ好影響ヲ及ボシ、肺機能ノ變化、肺ノ解剖的變化、其ノ血行竝ニ淋巴行ノ變調等ガ相倚ッテ、增殖性ノモノニハ勿論、滲出性ノ結核性病變ノ周圍ニモ肉芽組織乃至結締織ノ增殖ヲ來タサシメ、周圍組織ヘノ蔓延ヲ防衛シ先ヅ臨牀的治癒ヲ起サシメ、更ニ病理解剖學的治癒ヲ得セシメ、勿論重症ナ空洞性肺結核ニ於テモ時トシテ自然的治癒ヲ營ム事ガアッテ、斯カル場合ニハ該患肺ハ萎縮變縮シ此ノ解剖的變化ガ病勢停止乃至治癒ヲ招來シタノデアルノヲ病理解剖上知ルコトガ出來ル。而シテ斯カル自然治癒ノ症例コソ眞ニ肺結核ノ外科的療法ノ有意義デアルコトヲ雄辯ニ物語ルモノデアル。之ニ反シ非手術側デハ所々ニ輕度ノ治癒ノ傾向ヲ示ス部分ガ存スルガ、一般ニ新鮮ナ病竈多ク而カモ瀰蔓性ニ蔓延擴大シ甚シキ進行性態度ヲ呈シキタ、卽チ著者ノ檢査症例ノ多數ニ於テ手術側肺ニ好影響ヲ與ヘ、著シイ治癒的傾向ヲ現ハスガ、非手術側ニ進行性病變ヲ惹起シ死亡シタノヲ知ルト云フ、尙ホ著者ガ本研究中偶發見シタ事實デアルガ、新鮮ナ結核性病變殊ニ空洞ニ於テ、組織中ニ結核菌以外ニ多數ノ化膿性細菌ヲ證明シタ事デアル。斯ル症例ハ臨牀的觀察ニ於テ殊ニ著シキ弛張性熱型ヲ伴ヒ病勢ノ急速ニ增惡進行シタノヲ認メタノデ、肺結核ノ治療ニ當リ常ニ斯ノ混合感染ガ結核性病竈ニ不良ナ影響ヲ與ヘ得ル一事ヲ考慮ニ入レ置クナラバ、必ズヤ其ノ治療成績ニ好結果ヲ齎スモノト思ハレル。

（小林抄）

42、喉頭結核ノ質的診斷

Safranek.

(Zentralblatt für die gesamte Tuberkuloseforschung, Bd. 34. H. 7/8. 1931.)

一八〇〇例ニ就テ觀察スルニ五分ノ一以上ハ結核ノ蔓延期ニ來リ、肺ニ於ケル散在性病竈ハ殆ド常ニ存在ス、カヽル場合ニハ凡テ血行性ニ來ルモノナル故ニ喉頭結核ガ喀痰傳染ニヨリテノミオコルト云フ說ハ偏セルモノト云ハザル可カラズ、血行性ニ來ルモノガ增殖性ナルニ反シ滲出性ノモノハノイマン氏ノ隨屬性喉頭結核ニシテ腸結核ニ比ス可キモノナリ、白血球左傾、赤血球沈降反應、「ヂアツォ」反應、「ウロクロモーゲン」反應ハ凡テ疾病ノ重症度ニ平行シ、「ヂアツォ」、「ウロクロモーゲン」反應陽性ナル時ハ譬ヘ局所的病變ガ良性ナルガ如ク見ユル場合ニモ積極的治療ヲ行ハズ。

（春木抄）

43、涙腺結核ノ研究補遺

Santori Giuseppe.

(Boll. Ocul. 9, 1930.)

血液ノワッセルマン氏反應陰性ニシテ、兩側肺尖石灰化、肋膜硬皮、膝關節癒著等ヲ有スル三十八歲ノ婦人ノ右側涙腺腫脹ス、組織學的ニハ腺葉ハ大部分破壞サレ、間質結締織ノ增殖及ビ石灰化アリ、諸所ニ多數ノ結節アリテ、淋巴球ト上皮樣細胞トヨリ成リ、ラングハンス氏型巨態細胞ヲ交ユ、然カモ乾酪樣變性ハ無ク、組織中ニ結核菌ハ證明不可能ナリキ、著者ハ然レドモ、組織

學的所見ニ基キ涙腺結核ト診斷ス。

（菅沼抄）

44、二三ノ異型脈絡膜結核ニ就テ

Federici, E. (Boll. Ocul. 9, 1930.)

一、脈絡膜ノ集團結核、七十歳ノ農婦、臨牀上、全眼球炎慢性涙囊質ト診斷サレ、角膜ノ化膿穿孔起リ、眼球内容除去ヲ行ヒタルモ、次デ之ヲ摘出セリ、之ヲ割截スルニ球内ハ可ナリ固イ物質ニテ充サレ、組織學的ニ此物質ハ白血球、淋巴球、上皮樣細胞、巨態細胞、壞死組織ヨリ成リ結節ヲ形成スルモ、乾酪樣變性ハ無シ、組織片ヲ家兎ニ移植セルニ、肺炎菌ニ由ル全身傳染起レリ、著者ハ、患者ガ慢性ノ氣管枝「カタール」ニ苦ミツヽアル事實ト其體質トヨリ見テ、脈絡膜ノ集團結核ヲ有スル眼ニ肺炎菌ノ二次的傳染ノ起リシモノト考ヘル。

二、散在性結核性脈絡膜炎、普通ニ見ラレル慢性虹彩毛樣體炎（結核性）後ニ眼底ニ散在性脈絡膜炎ノ起リシタメニ著者ハ之ヲ結核性散在性脈絡膜炎ト信ズル。

三、脈絡膜ノ粟粒結核、二十六歳ノ婦人ノ兩側眼底ニ粟粒結核ノ所見ヲ呈スル多數ノ小病竈アリ、徐々ニ瘢痕ヲ形成ス、全身ヲ檢スルニ肺尖疾患アリテ全身狀態不良ナリシモ後ニ至テ恢復セリ、之ヲ以テ見ルニ、脈絡膜粟粒結核起リシトテ世人ノ信ズル如ク常ニ必シモ生命ノ豫後ノ不良ナルモノニ非ズ。

（菅沼抄）

45、眼結核特殊療法ノ原理

Samojlov, A., (Russk oftalm. Z. 12, 1930.)

ランケノ分類法ニ從ヒ、著者ハ凡テノ結核性眼疾患ヲ、其第二期ニ屬スルモノト見ルノミナラズ、更ニ之ヲ第二期ノa—輕度ノ毒過敏期、第二期ノb—強度ノ毒過敏期、竝ニ第二期ノc—比較的免疫ノ初期、ニ分類スル、而テ著者ノ此ノ分類法ハ臨牀所見及ビレントゲン所見竝ニマントウ氏反應ノ性質ニ基クモノニシテ、マタ此分類法ニヨッテ特殊療法ノ適否ヲ定メントスルナリ。

卽チ「ツベルクリン」療法ノ適否ヲ定メントスルニ當リ、著者ハ先ヅ患者ノ全身狀態ヲ精査シ、レントゲン所見ヲ檢シ、更ニマントウ氏反應ヲ見定ムルコトヲ必要トシ、眼症狀其物ノミニヨリ治療ノ方針ヲ定ムルコト不可能ナリト說ク、而テ第二期ノa、及ビ第二期ノcハ、特殊療法ノ適應期ニシテ、特ニ第二期ノaニ於テ其效果最著明ナリト謂フ、卽チ虹彩炎、虹彩毛樣體炎、脈絡膜炎等ハ「ツベルクリン」ニヨッテ最良ク治癒シ、出血ノ傾向ヲ有スル滲出性病機ニ對シテ本療法ヲ試ミントセバ細心注意スルコトヲ要シ、第二期bニハ本療法ハ禁忌ニシテ、タヾ場合ニヨッテハ、充分ノ注意ノ許ニ行ハレル本法ニヨッテ好結果ヲ收メ得ルコトアリ、而テ著者ハコッホノ舊「ツベルクリン」ヲ常用シ、ソノ皮下注射ヲ通例トシ、タヾソノ多量ヲ必要トシ或ハ特別ノ注意ヲ要スル場合ニノミ皮内注射ヲ行フ、卽チ一百萬倍液（時ニハ一千萬倍液）ノ〇・二瓩ヨリ始メ、極テ徐々ニ而カモ連續的ニ增量ス、カクシテ全身竝ニ病竈反應ノ輕度トナルトキハ、コッホ氏檢査ヲ行ヒ、其ノ結果ヲ見テ、其後ノ治療ノ適否ヲ決定ス、而テ第二期ノ末期ノ疾患ハ數月乃至ハ一年ニモ亙ル長期ノ治療ヲ行フノ要アリ、「ツベルクリン」ノ過少量（無反應量）ヲ長ク反復注射スルコトハ危險ニシテ蓄積現象及ビ急劇ナル反應ノ起ルコトアリ、要ハ感作閾價 Sensibilitätsschwelle ヲ査定シ、治療中、此ノ閾價ヲ超ヘザルコトヲ要ス。

（菅沼抄）

46、眼結核ト肺結核トノ相互關係ニ關スル問

題

Natanson, D., (Russk. oftalm. Z. 12, 1930.)

ステルンベルグハ、結核傳染ノ、同一胚葉ニ屬スル組織間ニ好發スルコトヲ記載セルノミナラズ、異種胚葉組織間ニハ一定ノ免疫狀態ヲ認メ得ルトナシ眼球前半部ノ結核ハ、皮膚結核ノ際ニ、發病スルコト多ク、肺、腸、骨等ノ結核ノ際ニハ稀ナリト主張セリ。

眼球ハ種々ノ胚葉組織ヨリ成ルガ故ニ、諸種ノ眼球結核ト肺所見トヲ比較スルコトニヨリ、ステルベルグノ學說ノ正否ヲ判定シ得トナシ、著者ハ、種々ノ眼結核ヲ有スル十六歲乃至四十九歲ノ患者十四名ニ就キ肺ノ狀態ヲ檢査セルニ、凡テノ患者ニ初期症候群 Primärkomplex アリ、十三例ニ於テハマントウ氏反應著明ニシテ、ランケノ第二期ノ早期ニ屬スル一例ニ就テノミ此ノ反應陰性ナリキ、此ノ如クシテ著者ハステルレベルグノ假說ニ反スル結果ヲ得テ、中胚葉組織モ、外胚葉組織モ共ニ肺結核ニ同一程度ノ關係ヲ有スル事實ヲ發見セリ。

（菅沼抄）

會報竝ニ雜報

○五月中新入會者

田添武吉　三重縣多氣郡相可町
前田盛作　鹿兒島市山之口町七三
竹內重雄　東京府下伊豆大島元村二五
岡壽郎、東京府學務部府立清瀨病院假事務所
三宅秀隆　大阪市港區八雲町四ノ一八
東山石松　東京市芝區白金三光町三二
松波寅吉　名古屋市東區千種町元古井三八

○北里博士ノ訃

本學會評議員ニシテ創立時ノ第一回會長タリシ北里柴三郎博士ハ六月十三日突如薨去セラル、洵ニ悼惜ニ堪エズ、十七日靑山齋場ニテ行ハレタル告別式ニ於テ本學會ハ靈前ニ花環ヲ捧ゲ岡田會長ハ本學會ヲ代表シテ弔詞ヲ奉呈セリ。

○會員ノ訃

左記會員ノ訃報ニ接ス謹ンデ弔意ヲ表ス。

佐藤理太郎　山科清三